

(1) 単元名： お話の続きを書こう。(読む)

わにのおじいさんのたからもの かわさきひろし 《教育出版》

(2) 本時の目標： わにのおじいさんとおにの子の対話を確かめながら読もう。

今年度赴任の教師、前任は名護市内の大規模校であったが、育児休暇明けの、久しぶりの現場復帰である。明るく元気に、みんなで楽しくがモットーの教師で、4月当初から元気いっぱいの学級経営、授業経営に取り組んでいた。4月の校内研修で、「授業ではテンションを下げ、低い姿勢で、可能な限り教師の言葉を少なくし、子どもの声で授業を進行しましょう。」と確認した。教職経験5年これまでの自分のやり方がすべて否定された形になった。1学期は戸惑いと不安と疑念に揺らいでいた。本を読み、同僚の授業を見せてもらい、講話を聴き、他校の授業を参観しなんとなく「こんな感じかな？」が見えてきたのは2学期だった。



ちなみに本時は校内研修や互見授業でもありません。以前から楽しい授業になりそうだったら声かけてねと私からの依頼に応えてくれた志願の授業研である。

テンションを下げる、子どもの声を拾うこと、ペアや仲間につなぐこと、これまでの自分の意識になかった新たな授業づくりへの挑戦である。

☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

【黙想指導】

学習への気持ちの切り替え、心を落ち着かせる。今年度の4月から学習規律の一指導として取り組んでいる。やはり2年生、まだじっと目をつぶれない子もいる。気にしなくていい。ぼくなりに頑張っ、て、友達の邪魔にならないように気遣っているだけでも立派な成長である。写真左下、子ども達を見守る教師の目がある。ちょっと緊張して表情が硬いが、「この子達といっしょに。」覚悟を決めて臨んでいる。形や姿だけでなく、子どもの言葉や行為から、心に見える教師になってほしい。



【読む】 音読する

授業者は、すぐに全文音読を指示した。日常的に音読の学習がしっかり行われている。どの子もしっかり自分のペースで読んでいる。国語の学習はまずは読み(音読)の徹底である。読めないと語れない。音読は読めない子への支援でもある。弱い子にとって隣の友達の音読に合わせて文字を追いかけることは、最大の助けになる。そのうち、音と文字が一致し、みんなと同じように読めるようになる。



写真①



写真②



写真③、音読の後、授業者は昨日までの授業の振り返りをペアにあずけた。学習進行表で昨日までの学習とお話の内容を確認する。

授業者の言葉が子どもの心に届いていることを確認した。みんな一斉にペアや近くの友達と昨日までの学習とお話の内容についてきき合う。



写真③

写真①、○の女の子、ほとんど覚えてしまっている。本を開かずに実に気持ちのこもった読みをしている。他にも数名(私の確認では4人)ほとんど本を見ずに読んでいる子がいた。教室に響く音読の声が実にこころいい、おじいさんになりきっている子もいる。おにの子になりきっている子もいる。疑問を感じながら線を引いたり書き込みをしながら(写真②)読み進めている子もいる。

【どの子も一人にしない】 低学年のうちからペアや仲間と「きき合う」習慣を身に着けさせる。

一人残らずすべての子の学習参加を実現することは容易ではない。「分からない」ことを仲間に訊くことができずに、一人で困っている子をとときどき見かける。授業者による個別支援にも授業中には限界がある。では、どうするか?が授業づくりの課題となる。このクラス、一人も授業に参加できない子が見当たらない



どの方向にカメラを向けても、仲間同士がしっかり「聴き合っている」写真の通りである。「きき合う」が習慣化され、ペアで向かい合って伝え合うことができています。

この風景が、仲間を仲間が支えすべての子どもが学習参加が可能になる授業風景である。授業における教師の個別支援には限界がある。思い切って仲間にあずけることが肝心となる。

[子どもの読み]

授業者が、おにの子と、わにのおじいさんの会話文を音読させる。

※ わにのおじいさんの会話から

「きみに、わしのたからものをあげよう。うん、そうしよう。
これで、わしも心おきなくあのよへ行ける。」

子ども達の思わぬ疑問が、学びのネタになり、深まりや広がりを作る。子どもの読みや、感性を大事にしたい。



教師：のあさんと同じ考えの人いますか？

男子数名が手をあげる。

教師：どっちだろうペアでお話してごらん。
(友達の疑問を、みんなにつなぐ)

教師：会話文に一齐音読を入れる。

かずたを指名する。

教師：みずきさんは「おかしくないよ」って
言ってるんだけど、みずきさんお
話してみて、どうぞ。

のあ：うん、そうしようは おにの子の言葉だよ。
おじいさんの言葉におにの子が答えているんだよ。

子ども達一齐に聴き合う。夢中になってペアで話す。

かずた：のあさんと同じで、だっておじいさんが自分で言っ
て、自分で答えるっておかしいじゃん。

(みずきさんが後ろからブツブツつぶやく)

みずき：だって、たからものは お
じいさんのものだから、あ
げるかどうかはおじいさん
が決めることだから、おじ
いさんの言葉だよ。



えなさんが、かずたさんの話
に何か言いたそうなくさと視
線を送る。

察した授業者が指名する。

教師：えなさん、どうぞ。

えな：たからものは わにのおじいさんからもらうから
うんそうしようは、おじいさんの言葉。

教師：おじいさんの言葉なんだ。

りゅうご：うん、そうしよう にはかぎかっこがついていな
い。だから1つだよ。

みずき：うん、そうしようはかぎかっこが1つで、わけられ
てないから、おじいさんの言葉だよ。

5分ほどの、子ども達のやり取りである。子どもの素朴な意見をみんなで吟味し、学び合いのテーマとしてつなげた授業者の臨機応変な授業デザインに関心した。教室の仲間の疑問を授業者が説明するのでなく、自分たちで解明していったのである。子どもの声を拾ったこと、音読(部分読み)を入れたこと、ペアあずけたことが子ども達の学びを充実させたのである。

[本時最終の問い] 「おじいさんは、なぜおにの子に たからものをあげようと思ったのでしょうか。
あなたの考えを書きましょう。」

さて、この最終の問いどうですか？子どもによっては「おにのこが、やさしいから」で終わってしまいそうな問いでもある。しかし、授業者は、前時まで、「おにの子のやさしさがわかる文を見つけよう。」でしっかり、テキストに表された「おにのこのやさしさ」を子どもたちとおさえていた。今日は、そのことを踏まえ、わにのおじいさんの行為に対する「あなたの考えを書きましょう。」である。写真は各々にわたされたワークシートで互いに考えを聴き合うペアである。書く前や、書きながらでも、互いにきき合うことは最も大切である。一人では書けない子どもが絶対存在することを忘れてはいけない、二人の考えをまとめる作業でもない。分からないことや言葉を、仲間との対話で解決したり、自分の考えを広げるえることが目的である。ペアで話した後、自分の言葉でワークシートを書くことができればそれでいい。



[子どものワークシートから]

みずき：☆なくなる前に、たからものを ころやさしい人に あげたかったから。

のあ： ☆わにの おじいさんは そうとう年をとって いるから もうすぐ なくなるかもしれないから たからものをだいにしたいから おにの子に かんしゃのきもちをこめて だいにしてねと おにの子にたからものをあげた。

ここあ： ☆てんごくにいけるからです。あとおにの子にたからものを見せてあげたいからだと思います。

しゅうた： ☆だって、おにのこはたからものを見たことがないし、ほおの木のふといはっぱを わにのおじいさんに ふとんのようにしてくれて やさしかったから。

H・A先生お疲れさんでした。

おにの子のやさしさは、そのままこのクラスの子供達の優しさですね。素敵な授業ありがとうございました。

国頭学びの会ゆい